

## 「高齢者の心理（性格）」

### \* 高齢者のパーソナリティ（性格）

◎年をとると性格は変わるのか

[性格のビッグ・5（ファイブ）理論]

性格の基本的次元は5つの特性からなり、それにより説明・評価できるという理論

#### ①外向性

→ 愛着、主張性、活動性、肯定的な情動などの性格特性で、具体的な行動特徴としては、にぎやかで、元気がよく、話し好きで、勇敢で、冒険的、積極的な性格

#### ②協調性

→ 同調性や調和性などとも称される特性で、具体的な行動特徴としては、温かく、誰にも親切な、愉快で、人情の厚い、気前のよい協調性の高い性格

#### ③勤勉性・誠実性

→ 根気、徹底性、綿密性などに関連した言葉で、具体的な行動特徴としては、責任感があって、仕事や勉強に良心的、精力的に取り組む勤勉な性格

#### ④情緒安定性

→ 神経症傾向、情動性などと訳されることもある。具体的な行動特徴としては、気分が安定していて、不平不満がなく、気楽で、嫉妬深くない、理性的な性格。逆の場合は、気分が不安定で悩みやすく、神経質で嫉妬深く、感情的になったり、怒りっぽい性格となる。

#### ⑤知性

→ 経験を広く取り入れて、判断する能力に関係している性格特性で、経験への開放性とも称されている。具体的な行動特徴としては、好奇心があって、知識の範囲が広く、物事を分析したり考えたりする思慮深い、創造的で知性的な性格

○成人期～老年期までの縦断研究結果

情緒安定性、外向性、知性の3特性が加齢の影響を受けにくい（Costaら,1978/1980）

ビッグ5の各特性において加齢による変動は少ない（Conley,1985）（Soldzら,1999）

⇒ 今日の高齢者心理学では、老年期を迎えたからといって性格の変化をきたすものではないと考えられている。

○但し、以下のような変化により本来の性格傾向が拡大されたり、性格の変化をきたす高齢者もいることは確かである。

①心身の衰え

自信喪失、閉じこもり、消極的、抑うつ状態、暗く陰気、意欲低下

②感覚器の老化

五感の衰えによる情報量低下、新しいことへの積極性消失、

③環境の変化・人間関係の悪化

定年退職等による社会的地位の消失、子供の自立等による家庭内地位の消失など

○変化をきたした高齢者性格の特徴

①頑固になる、自己中心性、自分勝手

→現在の高齢者に多い特徴。知能の低下や環境への適応力の低下による

②ひがむ、嫉妬する、邪推する

→難聴の高齢者に多い。本来の性格特徴が聴覚能力低下により先鋭化

③保守的、内向的になる

→ほぼ平均して高齢者に見られる特徴。社会的・家庭的役割の喪失や体力の衰えにより外出等、外への働きかけが減る。環境への適応力が落ちているため自尊心が崩されることを恐れる。自分の地位・権威などを維持するため、自分の経験が尊重されることを望む。したがって、新しい変化・変革に抵抗・反対

④面倒くさがる

→知能・身体（視覚、聴覚等）の衰えにより根気や細かい作業を嫌う

⑤涙もろくなる

→感情をこらえる気力が衰えるため、感情過多となる。また、脳血管障害の後遺症により感情のコントロールがきかない場合もある

⑥愚痴っぽくなる

→自分が望むような外界へ働きかける力が衰えるため、不平不満で鬱屈を晴らす

⑦話がくどくなる

→伝わっているかが過剰に心配な為。軽い記憶障害が影響している可能性もある

⑧甘える

→体力の衰えで、もともとの依存心が増大、依存したほうが楽

⑨出しゃばる、我が強くなる

→経験豊富な自分でなければ…、年齢相応のプライドを保ちたい

⑩自慢する

→現在の惨めな気持ちを埋め合わせるため（補償作用）ひと時でも華やかだった過去の良い気分に戻れるため

⑪ケチ

→経済力低下・喪失の不安から異常に金銭に執着

⑫諦めが早い

→意欲・活動力低下により自力で不可能とわかると簡単に諦める。執着しない

⑬円熟する

→刺々しい性格の角が取れて円くなる。人生の荒波に揉まれて我を抑えてきた結果（大変良い性格変化だが、このようになる高齢者は少ない）

⑭感情（喜怒哀楽）をあらわにしない

→人生経験で利害や防衛のため、感情を抑える習慣がついており、そのまま高齢期に入っ  
てしまい、表情が鈍かったり、感情が鈍化している印象を与える

◎高齢者のパーソナリティ類型

○S.ライチャード(1968)による5つの人格特性

①円熟型

自分および自分の過去現在を受容しつつ、未来志向。日常生活に対して建設的に接しようとする。引退後も積極的に社会参加し、いろいろな趣味に関心を持つ。人間関係についての満足感が強く、且つそのための努力をする

②安楽椅子型

他者に依存するという受身的、消極的な姿勢で現在を受容。仕事に対する野心はなく、引退しているという現在の状況に甘んじて、楽に暮そうとしている

③自己防衛型

強い防衛体制を敷くことにより、老化の不安に対処。引退後、いつまでも活動することにより、適応できると考える

④外罰型（憤慨型）

今までの自分の失敗等に対して敵意を示し、その対処として他者を非難し攻撃しようとする。趣味もなく、特に死に対して不安、恐れを抱いている

⑤内罰型（自責型）

自分の不幸、失敗に対して外罰型と異なり、自責的態度をとる。意欲は少なく、受動的である。他者への関心も少なく、孤立し、死は耐えられない存在からの解放と受け取り、恐れない

◎高齢者の幸福感は高い？

○8～9割の高齢者が幸福であると回答（読売新聞全国世論調査結果 1999,2008年）

→ 何故か？ 考え方・心の持ち方

①精神的な安定を保つ → 諦め、慰め、忘却

②幸福感は相対的なもの → 自分より不幸せな人と比べる

※フロイトの自我防衛機制

要求が入れられず、欲求不満に陥り、そのストレスに耐えられなくなった時に、自分の精神状態を安定させるためにとる無意識的な心の動き

○E. H. エリクソンの理論

高齢期の統合性（完全性の確立、自我の統合）の発達段階

→ 自分の人生を自らの責任として受け入れていくことができ、死に対して安定した態度をもてる段階

※エリクソン(1959)の心理社会的発達理論

人生のライフサイクル（人生周期）を8つの段階に仮定した心理社会的発達理論

①乳児期 I	基本的信頼	⇔	基本的不信
②幼児期前期 II	自律性	⇔	恥、疑惑
③幼児期後期 III	自主性	⇔	罪悪感
④学童期 IV	勤勉性	⇔	劣等感
⑤青年期 V	同一性	⇔	同一性混乱
⑥成人期 VI	親密性	⇔	孤立
⑦中年期 VII	世代性	⇔	停滞
⑧老年期 VIII	統合性	⇔	絶望、嫌悪

\*参考図書

- 「高齢者心理学」 佐藤眞一／権藤恭之 編著 ミネルヴァ書房  
「高齢者の心理」 近藤 勉 著 ナカニシヤ出版  
「高齢者の心理がわかる Q&A」 井上勝也 監修 中央法規  
「老人の心理がわかる本」 下中順子 著 河出書房新社